

緑のまきば

2004 No.37

小金井緑町教会
小金井市緑町四一六―三三
電話〇四二―三八八―七九六一
牧師 山畑 謙

説教

『空手で』

山畑 謙

「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。

わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。」

(ヨハネ六・六三)

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は永遠の命を得る」というイエス・キリストの言葉に、多くの弟子が躓きました。それはまだ十字架を知らずに言葉の上っ面だけをとらえたことに原因があるのでしようか。どうもヨハネ福音書が記された紀元九〇年頃にも、なお同じような躓きが起こっていたようです。この躓きは普遍的な躓きで、主の十字架と復活を知っていても現代の私たちにも起こり得るものなのです。

通ろうとしながら、通れないため、広い門へと向かってしまった姿だとも言えるでしょう。狭き門は、宗教改革のスローガンとも言える「信仰のみ」によって通ることのできる門です。通れないとすると、それは信仰以外の何かを手持ってしまったているからです。それが狭い門にひっかかってしまうのです。

先日、朝日新聞に「消えていく言葉」という記事があり、その一つに「空茶を出す」というものがありました。恥ずかしながら、出廻らしのお茶という意味か、などと愚かな当て推量をしていました。空茶の正しい意味は、茶菓子なしに茶を飲むこ

と、茶だけ出すことと『広辞苑』にあります。空とは、何も持たないことという意味があります。同じような言葉として、手に何も持たないことを「空手」というのです。何も瓦を割るだけが空手ではなかったのです。狭い門を通るためには、空手でなければなりません。あれもした、これもあると自分の手に業を握りしめていると、それが邪魔をしてしまうのです。主の裂かれた肉と流された血に象徴される犠牲によって一〇〇パーセント赦された信じ信頼するならば、手みやげになるようなものは何もないはずで、

理屈で分かったつもりで、どうしてなお手の中に己の業(肉)を握りしめ、そこに執着してしまっている。イスカリオテのユダは他の弟子たち同様にすべてを投げうって主イエスに従ってきた人でした。皆のお金を預かって管理までしており、信頼もされていた人です。そのユダの裏切りは単に金に眼がくらんでした事ではないでしょう。彼は、彼なりの主イエスに対する理想像を持っており、十字架に向かう主はそれとかけ離れていくばかりです。そのために、

これまで重ねてきた犠牲や労苦が大きいほどに、その理想像に主を従わせようとして裏切ったと見えます。己が描く理想世界のために、手に抱え込んでいる努力や犠牲が大きいほど、他者を無理に従わせ、そのためには悪しき手段さえも正当化していく悪魔の論理が彼を捕らえていたのです。

己の手の業(肉)に執着する愚かさや弱さを、私たちも持っています。そこから如何にして自由になるのでしょうか。ただ主の憐れみにする他ありません。霊であり命である主の言葉に聴き入り、主の十字架を心のうちに仰ぐとき、聖霊の御助けによって独り子をさえ惜しまず与えて下さるほどかけがえのない者として自分が認められ、受け入れられ、愛されていることに目を開かれるでしょう。その時、肉の業を握りしめるその手の力は抜けて、ついに空手となるでしょう。主が会堂長ヤイロの死んだ娘に「タリタ・クム」(少女よ、起きなさいの意)と呼んで、その手を取って起こされたように、私たちの空手をとって、起こしてくださいでしょう。